はくちょう　かりうど

白鳥と狩人

—ブリヤートの民話

БУРЯАД ХЭЛЭНЭЙ ОРШУУЛГА

監修・モンゴル語・日本語：山越康裕

絵：さねすえ

［語り・原案：ガルゾート・ツェ・ドガルマー］

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

ᠬᠤᠭᠤᠷᠠᠨ ᠳᠤ ᠬᠣᠪᠢᠲᠠᠨ

— ᠪᠤᠷᠢᠠᠳ ᠬᠡᠯᠡᠨᠡᠶ᠎ᠢ ᠣᠷᠣᠰᠢᠭᠤᠯᠭᠠ

ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠭᠠᠴᠢ᠂ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠪᠣᠯᠣᠨ ᠶᠠᠪᠤᠨᠢᠭᠠᠨ᠂ᠶᠠᠮᠠᠨᠠᠭᠠᠴᠢ᠂ᠬᠣᠯᠪᠣᠭᠴᠢᠳ᠂ᠬᠣᠯᠪᠣᠭᠴᠢᠳ᠂ᠬᠣᠯᠪᠣᠭᠴᠢᠳ᠂᠂᠂

Эхэ бэшэгһээ япон оюутан Макиси Томоко буряадаар оршуулба.

ХУН ШУБУУНАЙ ҮЛЬГЭР

——БУРЯАДАЙ АМАН ЗОХЁОЛ

Ямакоши Ясүхиро эмхидхэбэ
Санэсүэ зураг зураба
Галзууд Сэрэндашай Дугармаа үльгэр яриба

モンゴル語・日本語：山越康裕
絵：さねすえ
［語り・原案：ガルゾート・ツェ・ドガルマー］

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

Буряад Монгошууд хадаа
хун шубуун гарбалтай
хуhан модон сэргэтэй
гэжэ хэлэдэг.
ᠪᠤᠷᠢᠶᠠᠳ ᠮᠤᠩᠭᠤᠰᠤᠤᠳ ᠬᠠᠳᠠᠠ
ᠬᠤᠨ ᠱᠤᠪᠤᠤᠨ ᠭᠠᠷᠪᠠᠯᠲᠠᠢ
ᠬᠤᠬᠠᠨ ᠮᠣᠳᠣᠨ ᠰᠡᠷᠭᠡᠲᠡᠢ
ᠭᠡᠵᠡ ᠬᠡᠯᠡᠳᠡᠭ᠃

「わたしたち ブリヤートは 白鳥(はくちょう)からうまれた」
こういうふうに いわれているんだよ。

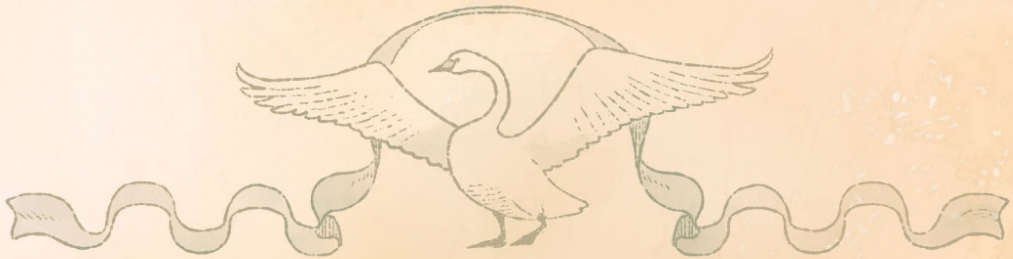
Эртэ урда сагта, Байгал далайн хүбөөндэ нэгэ аншан хүбүүн байба.
Нэгэ үдэр, анда гараад ябажа байхада тэрэ нуурта долоон басагадууд уhанда орожо байба гэнэ.

むかしむかし、バイカル湖(こ)という みずうみの
ほとりに ひとりの かりうどが いました。
あるひ かりうどは みずうみで 7人(にん)の
むすめたちが みずあびを しているのを
みかけました。

Аншан хүбүүн тэдээнииe хараад лэ байба.

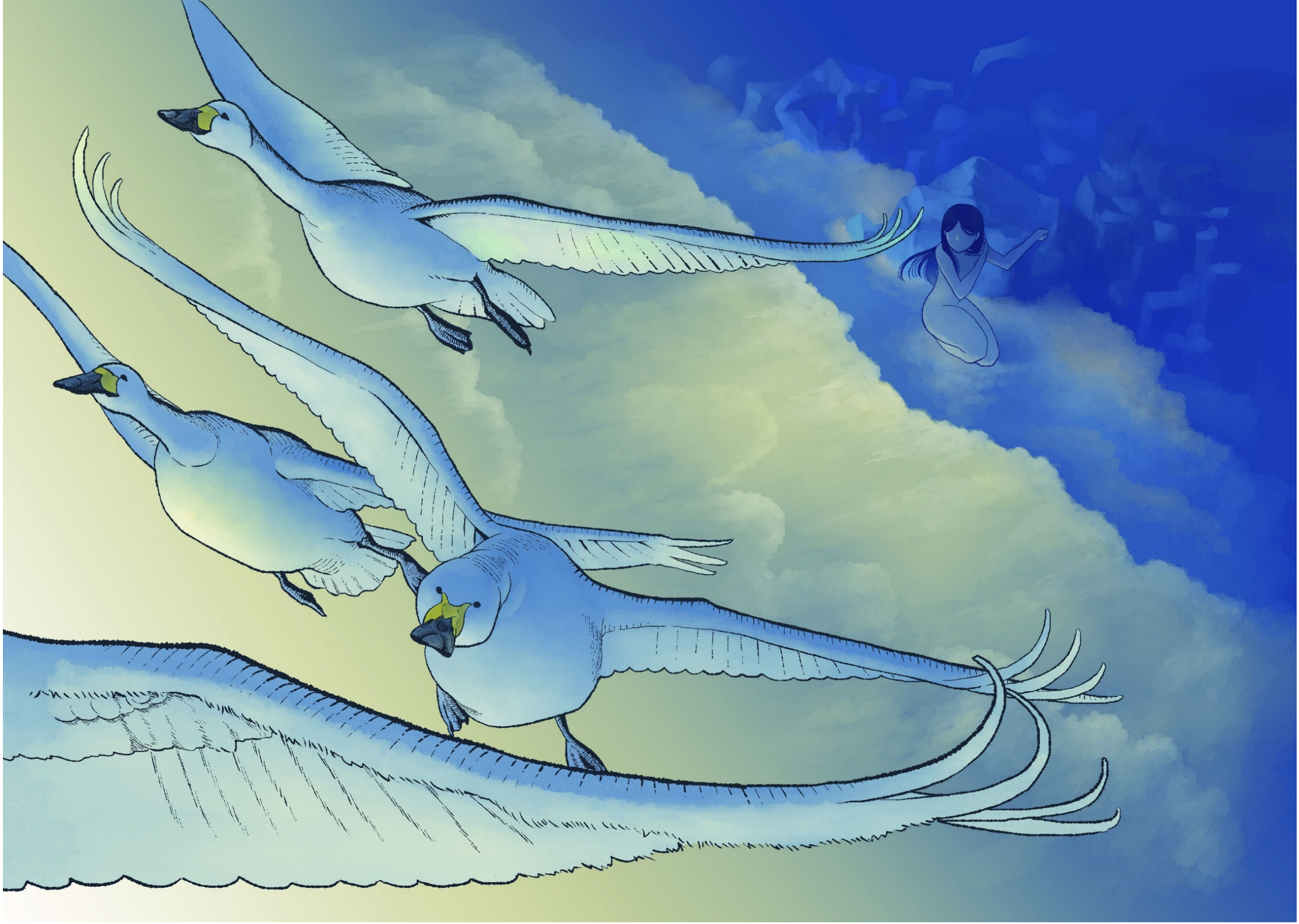
Тиигээд долоон басагадууд байхада hэмээхэн ошоод нэгэ басаганай хубсаhыень абаадшулуун доро нюужархиба.

かりうどは こっそりと
むすめたちに ちかづき
そのなかの ひとりの ころもを
かくして しまいました。



Иигээд хараhаар байтарнь тэрэ басагадууд
уhанhаа гараба.
Зургаанииь хубсаhаа үмдөөд хун шубуун болобо.
Гээшье нэгэ басаганииь хубсаhангүй байба.
Зургаан хун шубуун ниидээд ябашаба.

しばらくして むすめたちは みずあびを やめ
ころもを きました。
すると 6人の むすめは 白鳥に すがたを かえ、
とおくの そらへ とびさって しまいました。
でも ころもを かくされた むすめは
白鳥に なることが できません。
みずうみの ほとりに ひとりだけ
のこされて しまいました。



Тиигээд аншан хүбүүн тэрэ үлдэhэн басаганhаа ошожо hураба.
«Таанад ямар зон гээшэбта.»
«Бидэ тэнгэриин дангинабди. Минии хубсаhан үгы болоод би мүнөө хун шубуун боложо шадахагүй болооб. Гэртээ бусажа шадахагүй болооб.»

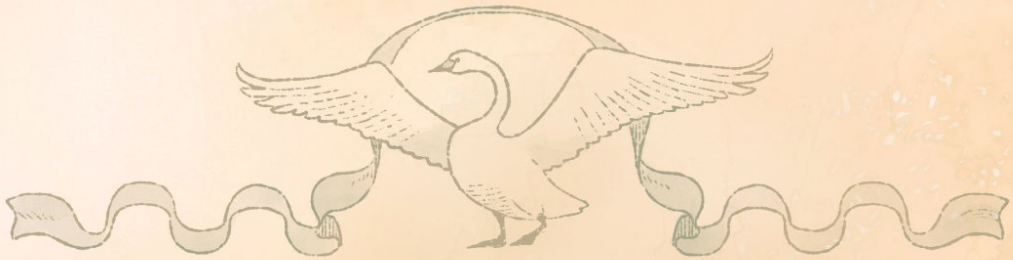
かりうどは むすめに ちかづき たずねました。
「あなたたちは どこから きたんですか？」
「わたしたちは てんにょ なのです。
ころもが なくなってしまったので
白鳥(はくちょう)に なることが できず、
そらに かえれなくなって しまいました」

Аншан хүбүүн: «Тиигээд намтай амидар» гэжэ хэлээд басаганииь дахуулаад гэртээ бусаад, айл болоод хоюулан амидарха болобо.

かりうどは いいました。
「それなら わたしと いっしょに くらしましょう」
そうして かりうどは むすめを じぶんの ゲルに
つれて かえりました。

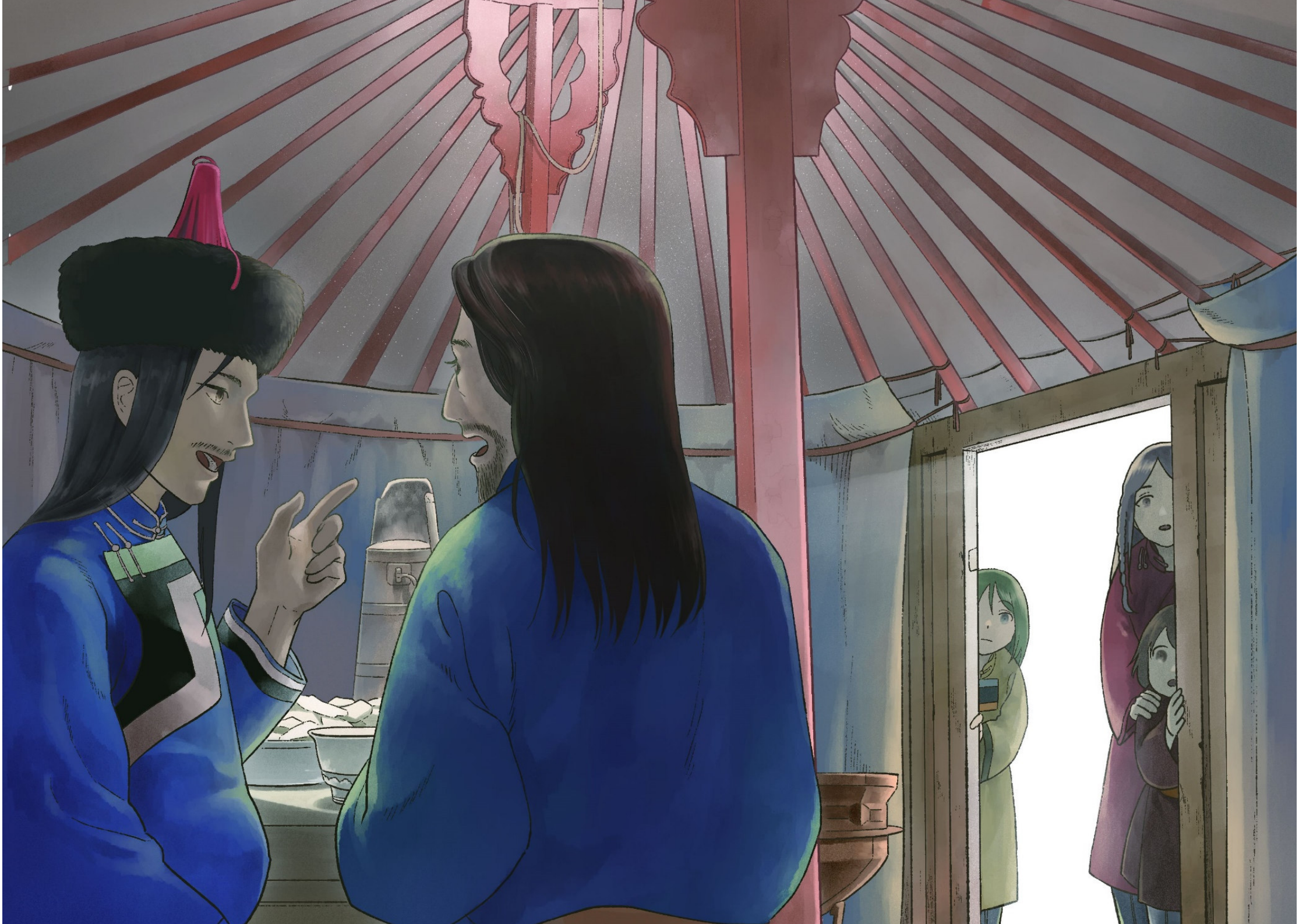
Айл болоод удаан амидарба.
Хэдии дахин үхибүүдтэй болоод, үхибүүдшье томо болоhон гэнэ.

いっしょに なかよく くらす ふたりの あいだには
おとこのこが 11人(にん)も うまれました。



Нэгэ үдэр тэдээнэй гэртэ нэгэ аяншан ерэбэ. Аншан хүбүүн аяншантай иигэжэ хөөрэлдэбэ гэнэ. «Эхнэрмни анха иигээд нуурай хүбөөнhөө оложо абаhан юм. Хубсаhангүй, хун шубуун боложо шадахагүй болоhон юм.»
Энэниие үхибүүд дуулаад,

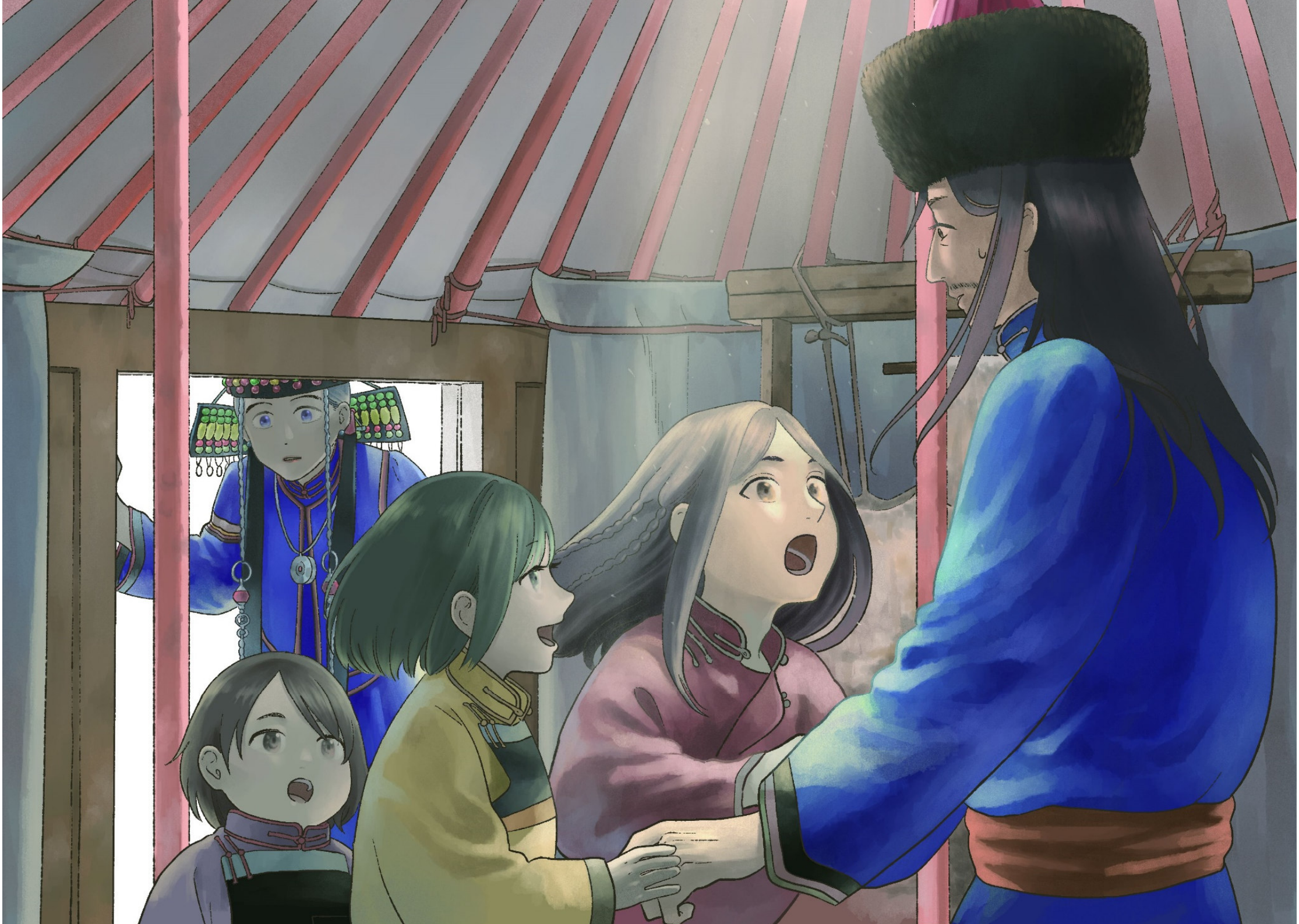
あるひ　かりうどの　ゲルに　たびびとが　やってきました。
たびびとを　もてなしていた　かりうどは　よっぱらって　ついひみつを　はなして　しまいました。
「わたしの　つまは　ほんとうは　白鳥(はくちょう)なんだ。
　ころもを　かくしたから　そらに　かえれなく　なったんだ」
それを　こどもたちが　きいてしまいました。



ᠡᠵᠢᠳᠡᠶᠢᠨ᠂᠂

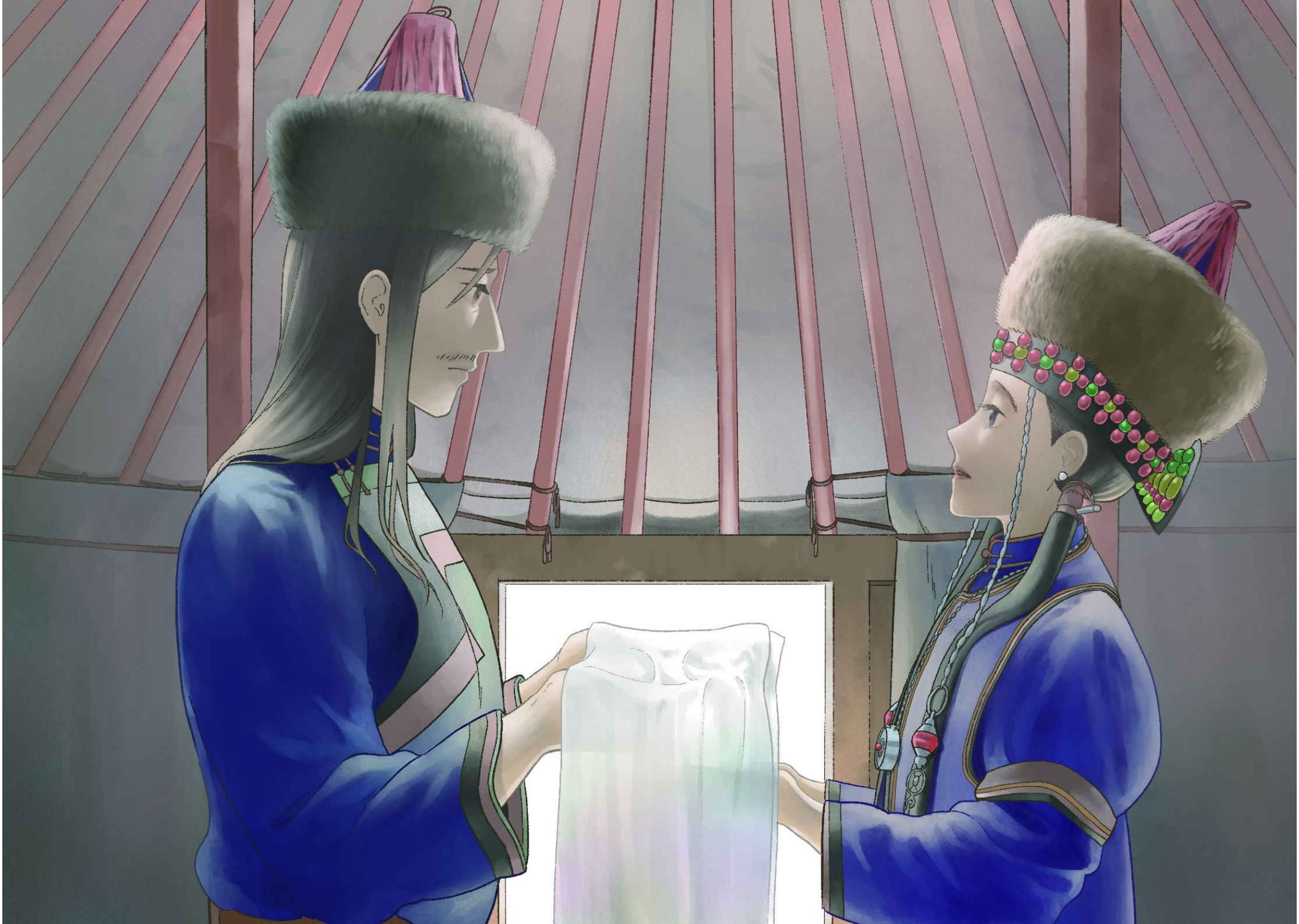
᠂᠂᠂

ᠪᠤᠶᠤᠨᠳᠤ᠂᠂᠂



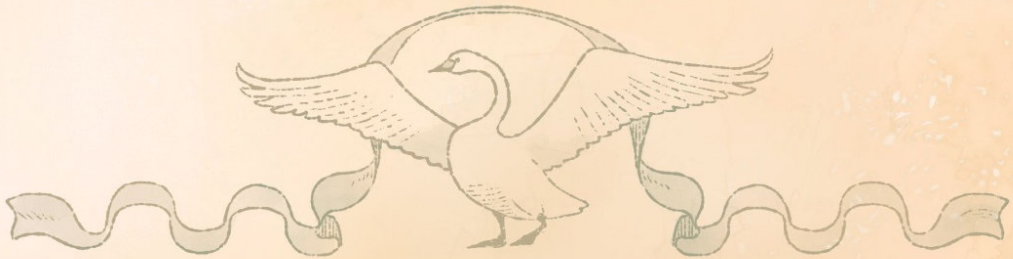
Мүнөө аргагүй болоод аншан хүбүүнь үхибүүдээ дахуулаад нюуhан хубсаhые асараба.
«Би шамтай айл болоод олон үхибүүдтэй болобоб. Би юундэ ябаха болоо юм биб, яабахагүйб.»
«Хамаагүй. Нэгэ удаа хубсаhаа үмдөөд үхибүүддээ хун шубуун боложо харуулыш даа» гэжэ хэлээд хубсаhынь үгэбэ.

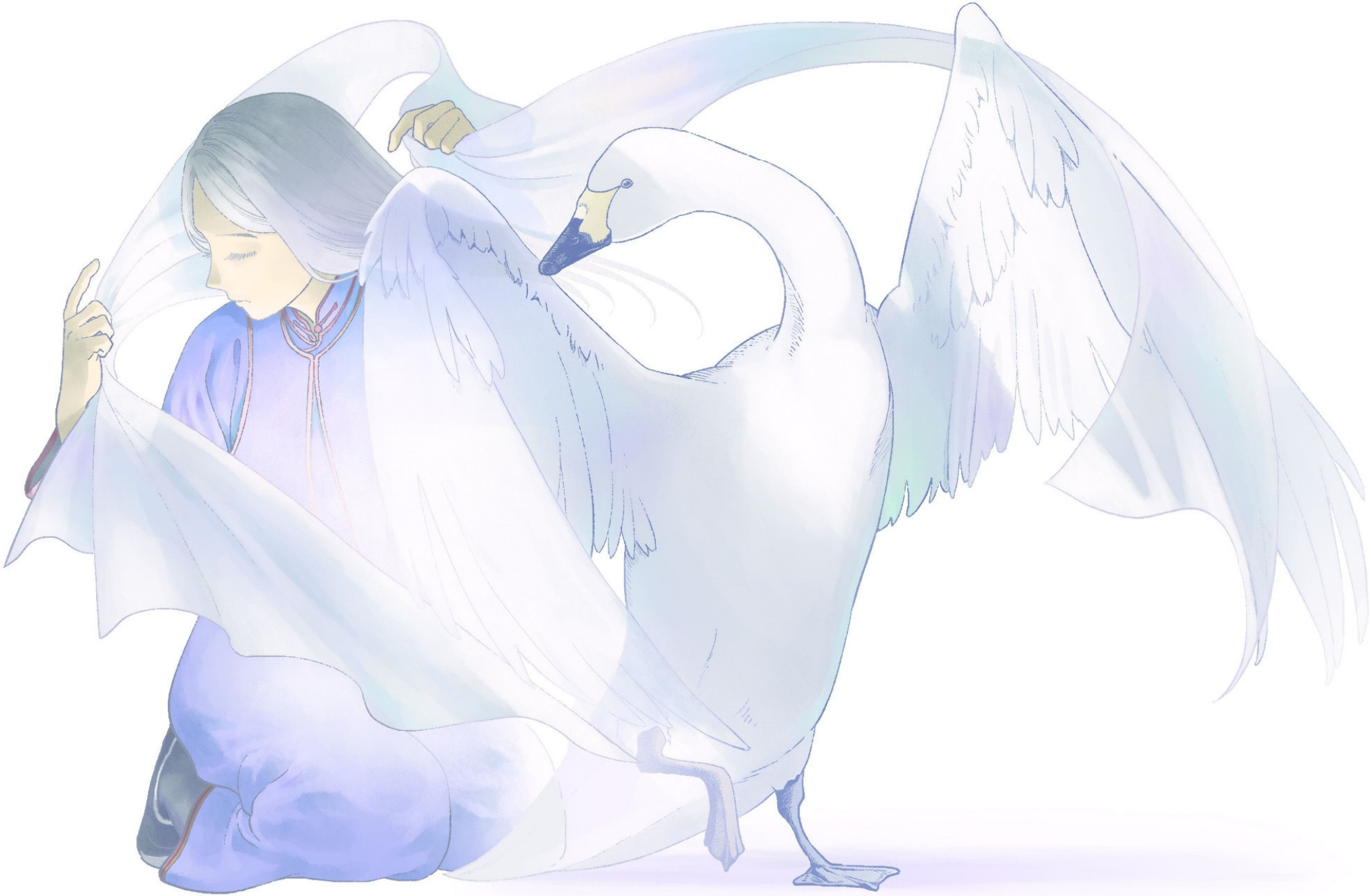
かりうどは しかたなく かくしていた ころもを もって きました。
「わたしは あなたと いっしょに くらして たくさんの こどもも できました。そらには かえれません」
「いや もう いいんだ。こどもたちにも みせて やってくれ」 そういって ころもを わたしました。



Хубсаһаа абаһан һамганинь долоон хоног бэеэ арюутхаад,
хубсаһаа үмдэхэдөө тэрэ доронь хун шубуун болошобо.

おかあさんは　7日のあいだ　からだを　きよめ
　それから　ころもを　みにつけました。
たちまち　おかあさんは　白鳥の　すがたに　かわりました。





Хун шубуун болоод гэр дээгүүр гурбан удаа эрьежэ ниидээд тооно дээрэ hууба.

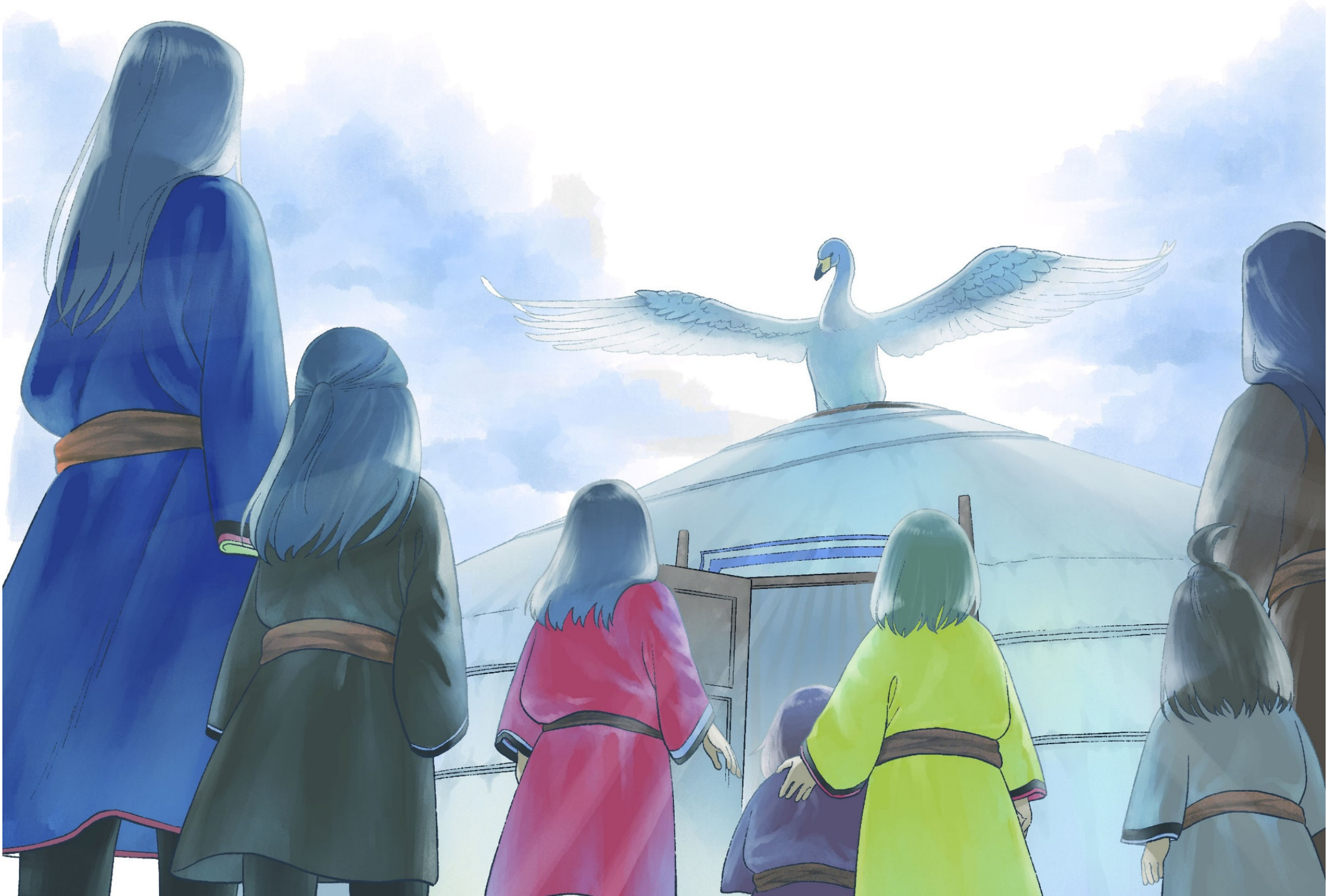
Аншан нүхэр, хун шубуун hамган хоёр арбан нэгэн үхибүүдтэй байба. Аншан Шаралдай гэдэг саданhаа Галзууд, Хуасай, Хүбдүүд, Шарайд, Гушад, хун шубуунай Нагаадай гэдэг саданhаа Харгана, Худай, Бодонгууд, Сагаангууд, Хальбан, Батанай. Иимэ арбан нэгэн үхибүүдтэй байба.

Тэрэ арбан нэгэн үхибүүддэ, «Таанад мүнөө арбан нэгэн эсэгэ боложо, арбан нэгэн омогтон боложо үржэжэ, hайн hайхан амидража ябагты» гэбэ.

白鳥(はくちょう)は ゲルの うえを 3回(かい) まわると てっぺんに とまりました。

かりうどと 白鳥(はくちょう)の 11人(にん)の おとこのこたちに 白鳥(はくちょう)は いいました。

「おまえたちは これから 11の そせんと なって たくさん しそんを ふやすのですよ」



Иигэжэ хэдээд ниидэхэдэ аншан нүхэр тогоо барижа гараараа hү үргэбэ. Хари хун шубуун hабараараа тогоо hабардаад ниидээд ябашаба. Тиимэ ушартай хун шубуунай hабарынь хара байдаг гэнэ.

こう つたえて そらに かえろうと したとき
かりうどは ミルクの はいった なべを もってきて
白鳥(はくちょう)に ささげようと しました。
でも 白鳥(はくちょう)は あしで なべを ひっかいただけ。
白鳥(はくちょう)は そらの むこうへ とんでいって しまいました。
なべを ひっかいた このときから
白鳥(はくちょう)の あしは くろく なったのだ そうです。

᠐᠊᠐᠊᠐᠊

Хун шубуун гарбалтай гэдэг буряадай
хөөрэлдөөн иимэ байна.

ᠬᠤᠨ ᠱᠤᠪᠤᠤᠨ ᠭᠠᠷᠪᠠᠯᠲᠠᠶ ᠭᠡᠳᠡᠭ ᠪᠤᠷᠶᠠᠳᠠᠶ
ᠬᠥᠬᠥᠷᠡᠯᠳᠥᠥᠨ ᠢᠢᠮᠡ ᠪᠠᠢᠨᠠ᠂᠂

ブリヤートが 白鳥(はくちょう)から うまれた という
おはなしは これでおしまい。

この話について：

この話は、現在のロシア・バイカル湖沿岸に暮らすブリヤートと呼ばれる人々に語り継がれている民話をアレンジしたものです。あらすじは日本各地に伝わる羽衣伝説と非常によく似ていますが、じつは類似のストーリーは、世界各地に見られます。

白鳥から生まれたこどもたちが11のグループ（氏族）の祖先となったと語り継がれていますが、この展開についても諸説あり、この絵本のとおりとは限りません。ただ、現在でもバイカル湖東部のブリヤート（ホリ・ブリヤートと呼ばれます）のひとびとはこの11氏族のいずれかに属しているとされます。

この、バイカル湖東部に暮らすブリヤートのひとびとの一部は、100年ほど前に中国側に移住しました。中国・内モンゴル自治区北部を流れるシネヘン川のほとりに、現在7,000名ほどのブリヤートのひとびとが暮らしています。私がこの話をうかがったドガルマーさんは、そのうちのお一人です。2000年8月28日にドガルマーさんよりこの話を収録して以降、いつかこの話を題材とした絵本を作り、現地のこどもたちに還そうと考えてきました。かなり遅れてのお返しとなってしまったことをお詫びするとともに、この地で、ロシアで、モンゴルで、ブリヤートの言語と文化を継承していくための一助となれば幸いです。

語り手のドガルマーさんはじめ、シネヘンでお世話になっているブリヤートの皆様、細かな描写で物語の世界を華麗に再現してくださった漫画家のさねすえ様、そしてさまざまなご縁のあった皆様に末尾ながら心より感謝申し上げます。

※本書は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（LingDy3）の活動の一環で、現地コミュニティおよび一般社会への成果還元を目的として製作されました。上記基幹研究の活動については、下記URLをご参照ください。

https://lingdy.aa-ken.jp/

山越　康裕（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

ドガルマー氏近影
（2002年9月16日, ご自宅にて山越撮影）

語り・原案：ガルゾート・ツェ・ドガルマー
1933年、現在の中国内モンゴル自治区フルンボイル市シネヘン西ソムに生まれる。小中学校の教員をされる傍ら、ブリヤートの民話をはじめとする口承文芸の記録と収集に尽力された。

モンゴル語・日本語：山越康裕
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授。モンゴル諸語の記述研究を専門とし、2000年より中国領内のブリヤート語に関する記述研究に従事している。

絵：さねすえ
漫画家・イラストレーター。
連載作品：『キャンパスの魔法使い』（講談社）

ブリヤート語を聞いてみよう！

本書のもととなったドガルマーさんの語りを、スマホアプリLingDyTalkを通じて聞くことができます。

1) App StoreもしくはGooglePlayStoreからLingDyTalkをダウンロード、インストール

2) 最初の画面で 201905 と入力し、>>ボタンを押す

3) 次の画面で本書の偶数ページにふられているページ番号を撮影（または主導で入力）し、再生ボタンを押す。

ドガルマーさんの語りのうち、当該ページの部分に相当する音声が再生されます。本書は絵本向けに大幅に簡略化しているのですが、ドガルマーさんの語りはより細かく語られています。ドガルマーさんの語りを正確に文字化したものについては、李林静・山越康裕・児倉徳和（編）『中国北方危機言語のドキュメンテーション』（三元社, 2018年）をご覧ください。

LingDyTalkの詳細はこちらをご覧ください

https://lingdy.aa-ken.jp/publications/tools-and-archives/3980

本PDFは山越康裕・さねすえ『白鳥と狩人―ブリヤートの民話』（2020年, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）にブリヤート語訳を付したものです。ブリヤート語訳は東京大学大学院博士前期課程 牧志朋子さんによります。
オリジナルは
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/94390
でご覧いただけます。

ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ ᠳᠤ ᠪᠤᠴᠠᠭᠠᠰᠤᠨ ᠳᠤᠷᠠᠯᠳᠠᠯ — ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ ᠳᠤ ᠬᠥᠭᠵᠢᠮ ᠳᠤᠷᠠᠯᠳᠠᠯ

᠐᠐᠐᠐ ᠣᠨ ᠳᠤᠮᠳᠠ ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ

ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ ᠳᠤ ᠪᠤᠴᠠᠭᠠᠰᠤᠨ ᠳᠤᠷᠠᠯᠳᠠᠯ ᠨᠢ ᠬᠥᠭᠵᠢᠮ ᠳᠤᠷᠠᠯᠳᠠᠯ ᠶᠢᠨ ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ ᠶᠢᠨ ᠨᠢᠭᠡᠨᠳᠦᠭᠡᠳᠦᠯᠵᠦ ᠪᠤᠢ᠂ ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ ᠳᠤ ᠬᠥᠭᠵᠢᠮ ᠳᠤᠷᠠᠯᠳᠠᠯ ᠶᠢᠨ ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ ᠶᠢᠨ ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ᠂ ᠬᠤᠪᠢᠳᠠᠯ ᠳᠤ ᠬᠥᠭᠵᠢᠮ ᠳᠤᠷᠠᠯ